

自信教人信のこころ

佐々木恵精

(ささき けいせい えしやう)

「自信教人信」というお言葉は、善導大師の「往生礼讚」の中で、仏恩報謝について、「自ら信じ人に教えて信じさせることは難しい中にもとりわけ難しい。仏の大悲を伝えて普く導くことが真の仏恩に報いることになる」と詠う讃偈によるものである。

この「難中の難」については、『法句経』に「人と生まれることは難しく生きること難しい。正法を聞くことも難しく諸仏の出現も難しい」と詠われるように、古くから説かれている。それは、遇いがたしい仏法に出遇い、聴聞しがたい仏法を聴聞する身となったことを慶び報謝するということを示すものでもある。

「信心」をこの身にいただき(自信)、それが人にもはたらくこと(教人信)となるのは、大悲のはたらしきによるものであり、大悲のはたらきに導かれていることを慶び報謝するというところであるといえる。また、『蓮如上人御一代記聞書』(九三、九五、一九三条など)には、「人に信をとらす」という伝道・教化には、まずこの私自身の上に「信」をいただくこと(自信)、すなわち、この身の「生死出づべき道」を求め、聴聞に聴聞を重ねることが大事である、と示されている。

八月に教学伝道研究センター所長を拝命して、センターにおける「教学伝道」について思案するところであるが、この「自信教人信」のこころを深く受け止めてこそ、親鸞聖人以来の伝統教学を継承する道と、変動してやまない現代社会に適切に応ずる道が開かれることとなるであろうと願われるのである。

(教学伝道研究センター所長)